

“I Have a Dream”ブックレビュー — M. L. キングを縦横に知る！ —

室井美稚子

(清泉女学院大学)

■はじめに

キング牧師と公民権運動と現在を結ぶ、「言い得て妙!」と思わせるフレーズがあります。“Rosa sat so Martin could walk, so Obama could run, so our children can fly.”「ローザが座ったのでキングが歩くことができた、だから、オバマが走ることができた(この時点では run for president の意)ので、我々の子どもたちは飛ぶことができる。」これは、アメリカ大統領選挙の際に聞かれたフレーズで、Tシャツまで作られました。

マーティン・ルーサー・キング・ジュニアの誕生日は、数少ないアメリカ全体の祝日ともなっています。これほど偉大な人物の足跡を多面的に生徒たちに紹介するには、まずは次の4冊をお勧めします。

●ラリー・ゴニック『まんがで学ぶアメリカの歴史』

(明石紀雄監修, 増田恵里子訳, 明石書店, 2007)

まず本書の素晴らしいところは、アメリカ合衆国の400年の通史を学べるところにある。それも漫画入りであるから、親しみやすいだけでなく、当時の風俗もわかる。奴隷を投入し、先住民を駆逐し、戦争などで領土を拡大していく歴史が、ヨーロッパや南米諸国との政治および経済関係も踏まえて書かれており、理解が大変深まる。「歴史的意義の理解」という難しい作業を手助けしてくれるだけでなく、著者のコメントが洒落で風刺が効いて出色である。

キング牧師その人の扱いはそんなに多いとは言えないが、何より彼が輩出されるに至る知識が豊富に述べられている点が得難い。奴隷制を導入した歴史的背景や彼らの待遇などである。初期の「奴隷法」では、次のようなことを合法としている。例えば、

「主人が自分の奴隷を15時間ずつ週6日働かせること」や「主人が殺害をはじめ、望むような方法で自分の奴隷を罰すること」である。また、読み書きを学ぶことも許されなかった!

そして、南北戦争・奴隷解放といえバリンカーンくらいしか人名が浮かばない身としては、逃亡奴隷で解放に力を尽くしたハリエット・タブマンやフレデリック・ダグラスという人物名を初めて耳にし、その活躍を知ることができたのは有益であった。「アフリカ帰還」運動やクー・クラックス・クランなどの存在、それらを超越しようとする動きから、1960年代の公民権運動への道は長かったことがわかる。

●M. L. キング『自由への大いなる歩み —非暴力

で闘った黒人たち—』(雪山慶正訳, 岩波書店, 1959)

本書はM. L. キングその人によって書かれ、書名にたがわぬ内容である。「愛と非暴力の思想」をいかに模索し、人々に伝えていったか。個人的な悩みや運動の迷いなどが率直に語られていて、偉人であるだけでない人間キングに出会うことができる。

「おれはこんな制度なんか決して承認しないぞ」と言っていた父との少年時代の思い出、抗議活動以前のモントゴメリーの「白人に頼って生活している」黒人の現実やそこから生じる問題、1955年のローザ・パークスの勇気に始まる抗議行動。そして、バスボイコットを迎える月曜日の朝のキングの心情がひしひしと伝わってくる。

人種の隔離を廃止させた運動の詳細や、そこから生じた非暴力運動への自信、また今後の運動の展開への不安などが語られている。特に、執拗な脅しにくじけそうになる自分との戦い。「人々はわたしの指導を求めています。もしも、わたしが勇気もなく

彼らの前に立つならば、彼らも勇気を失うでしょう」と苦悶している。人種問題は「まだまだ解決されるにはほど遠い」という状況の最中にあった M. L. キングとしては、道半ばに倒されるかもしれないとの予感の中で、それこそ必死に書いたのが本書である。

生徒には、もう少し易しい社内鏡人ほかによる『キング牧師』（岩波書店、1993）を勧めてもよいかもしれない。

●上坂昇『キング牧師とマルコム X』（講談社、1994）

アメリカの公民権運動を語るとき、キング牧師とマルコム X は光と陰のように対比されることが多い。非暴力をつらぬこうとするキングに対して、マルコム X は、一部の白人の暴力のすさまじさに、共存は難しいとする考え方をとった（後年は共存を模索した）。聖職者の家に生まれたという共通点があるものの、家庭環境でも明暗を分けた。マルコム X は、幼少期に、黒人解放を唱えた父を殺されたと言われており、本名のマルコム・リトルのリトルは奴隷時代の名字だとして X とした。イスラム教に帰依したマルコム、一方、キングはソローやガンジーの影響を強く受けた。

本書は「巷間に流布しているキング思想やマルコム X 思想には、誤解や不十分な理解や誤った解釈がある」としており、彼らの考えを知ることはアメリカの公民権運動について知るだけでなく、「多くの国が直面している人種問題や民族問題の解決に欠かせない」とある。

また、この両者については映画もある。映画『マルコム X』では、彼が刑務所の中で黒人であることに目覚める過程で、black に関連した語に black market など、いかに否定的なものが多いかを先達に教えてもらうシーンが印象深い。M. L. キングについては、バスボイコット事件を中心に扱った『ロング・ウォーク・ホーム』があるが、今年スピルバーグ監督が彼の人生を映画化する権利を獲得したようなので、どのような作品になるか大いに楽しみである。

●ジェームス・M. バーダマンほか編『アメリカの小学生が学ぶ歴史教科書』（ジャパンブックス、2005）

アメリカの発見から 1960 代までの通史で、それ

もアメリカの小学生用に編まれた教科書である。教科書といっても日本のような検定制度はないので、その作成過程は趣を異にする。大学教授である著者が、学生たちのあまりの基礎知識のなさに危機感を抱き、自ら歴史書を編纂した。それがベストセラーとなり、小学生用の教科書へと発展したそうである。小学生用なので平易な英語で書かれていて、図や写真が多いのも理解の手助けになる。また、本書は日本の英語学習者用に対訳本になっているのが嬉しい。

「アメリカ発見から植民地まで」の第 1 章から始まり、第 6 章では M. L. キングをはじめ、黒人差別法やバスボイコット事件からワシントン大行進などに多くのパートが割かれている。また、最終章である第 7 章に「公民権運動のリーダーの死」が扱われ、マルコム X のことも紹介されている。

また、同じ著者による『黒人差別とアメリカ公民権運動 — 名もなき人々の戦いの記録』が集英社新書で出ている。

■おわりに

今、アメリカは黒人大統領を戴くまでになり、M. L. キングの演説 “I Have a Dream” に語られている理想に大きく一歩近づきました。黒人差別は無くなりつつあるように見えますが、イラクやアフガニスタンに行くアメリカ軍における黒人の割合は、人口比に比べて依然として高く、格差の大きいアメリカ社会の中で、教育を受ける機会が少なく、貧困から抜け出せない黒人の現実が垣間見えます。

そういう黒人を含む貧困層の「今」を知るには、堤美果氏の『ルポ 貧困大国アメリカ』（岩波書店、2008）などが何よりでしょう。サブ・プライムローンの問題で世界にも知られてきましたが、アメリカにおいて貧困者が広がる現実には聞きしに勝る感があります。公民権運動は、決して過去の栄光であってはならないとの想いが湧いてきます。

また、翻ってみれば、私たち英語教員は、ALT をはじめ、外国から来た人々と日常的に直に接して、日本の歴史や現状も尋ねられ、説明する立場にあります。自国の社会問題にもっと向き合えばと改めて思いました。